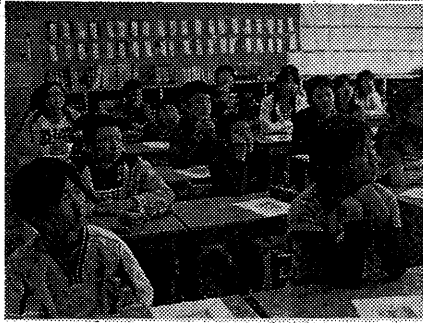


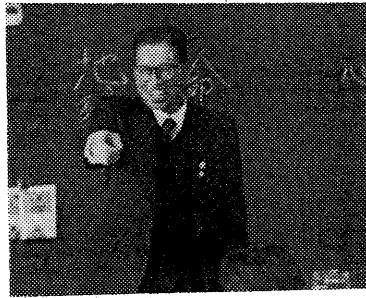
感想文集綴り

命と心

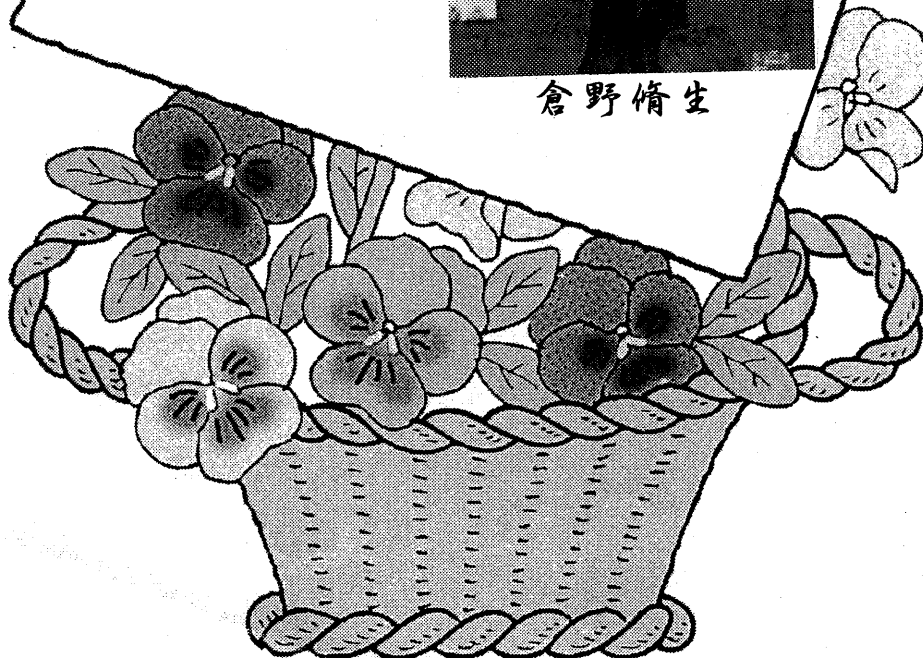
平成24年2月17日



小学6年生講話



倉野脩生



まえがき

私は1934年(昭和9年)満州生れの満州育ちです。

昭和20年8月15日を境に命と心の大切さを自分の目で耳で体験し、体にやきつけてきました。

それは戦争で大切な人を亡くされた人、頼る人を亡くし誰れかに面倒を見てもらわなければ生きて行くことができない人、日本に帰国する貨物船の中で、足腰の不自由な方、目の悪い人達を皆さんで助け合っつてやっとの思いで舞鶴に上陸しました。その時から必ず皆さんで支え合う福祉の社会が必要な時代が来ると信じ今日に及んでおります。

それから64年の年月がたち、今の日本では少子高齢化の波と子供の虐待、高齢者の孤独死などなどの世の中になってしまいました。

そこで私は、子供の安全と年寄りの安全を見守つての活動をしている中で一番大切な年齢の小学校6年生に命の大切さ、と心の大切さについてどのようにして伝えたらわかつてもらえるかを考え編み出したのがこれだと思つたのが色紙の針の穴だった。子供たちは初めて見た命の個体から話は始まる。

「いのち」それは言うまでもなく、かけがえのないものです。

「いのち」という言葉を辞書でひも解くと「生活の原動力、生命」とあります。

自分の大切さは親に感謝するしかなにもない、それは心からでるのだ。

大切な命、大切な心、すべて大切なことは目には見えない。

1. 地球の生き物の中で、人間、昆虫、家畜、活火山、植物、川、などがあるが人間しか持たないものがある。それが心だ。
2. 心しか、だせないものがある。それは言葉だ、心遣いだ。
3. 言葉の使い方、人を喜ばせ、人を傷つける刃物となる。
4. 言葉に化粧をしてだそう感謝の言葉、感謝の心が命につながる。

人間は勝つことにより負けることの難しさを話し、卒業してもらいます。

すると1時間授業で話した答えがこんな立派な感想文を書いてくれました。

私の話した事が子供に通じたことを感謝しています。

本当に私のところがわかってくれてありがたいの気持ちで

最後になりましたが、ご協力くださった皆さんありがとうございました。

南部小学校 校長 堀 治 士

6年担任 赤 木 尚 美

大分県老人連合会

ふるさとの達人講話登録者 倉 野 脩 生

あ と が き

『命』

かけがえのない大切なものであることは、頭では理解しています。でも、日々の生活の中で、自分が生きていること、生かされていることを当たり前と感じてしまっているのです。

小学校卒業という節目を迎えた40名の子どもたち。スクールガードとして6年間見守ってくださった倉野脩生さんが、そんな子どもたちに『命と心』について話をしてくださいました。針の穴ほどの小さな小さな命だったのに、家族の惜しみない愛情に包まれ様々な人と関わりながら、こんなに成長したこと。そして、感情をもつ人間として、相手の気持ちを考えた言葉の大切さ。

「わたしを生んでくれてありがとう。」

「今まで、親に対する言葉づかいがよくなかった…。」

子どもたちは、倉野さんのお話をしっかり受けとめていました。

この日、心で感じた思いをずっと忘れず成長してほしいと願っています。

6年生担任 赤木 尚美